一

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。本文中の〔　〕内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

科学者でもあり、哲学者でもあるヴァンダナ・シヴァによると、自然界に対する人間の暴力的な態度は、一七世紀から現代にいたる近代科学の中に根づいた「人間対自然」という二元論〔物事を二つに分類し説明しようとする考え方〕からやってくるものだ。そこでは、切り離された人間と自然が、一方は上位で、他方が下位というふうに、「優劣」「強弱」「上下」の関係におかれる。

近代科学は、それまで「母なる大地」や「神聖な生命」として敬われていた自然を、「機械」や「資源」という単なる「モノ」に変えてしまった、とヴァンダナは言う。万物を産みだし、a育む、たくましい母親のようだったそれまでの自然は、生命力を失い、受け身一方で、bソウサ可能な単なる〝モノ〟へと落ちぶれてしまった。ただの〝モノ〟になってしまえば、もう、それまでのように、「自然を敬え」とか「自然を汚してはいけない」とかと、人間が自分自身に言い聞かせてきた「倫理的な制約」もすべてとり払えることになる、と。

そして、それこそが、科学技術の飛躍を可能にしたのであり、経済の急速な成長による富の増大を可能にしたのだった。そして①自然界の生きものたちは単なる生産マシンと化して、膨らむばかりの人間の欲望を満たすために奴隷のように奉仕させられることになる。

ヴァンダナはそこで、もうひとつの重要な視点をつけ加えている。近代科学の基になった、「自然に対する人間の優位と支配」という新しい関係は、「女性に対する男性の優位と支配」という人間相互の新しい関係と密接に関係している、というのだ。この考えはエコ・フェミニズムという名前で知られる。それによると、近代以降、世界中で進んだ自然破壊と、女性に対する蔑視、差別、暴力とは、切っても切れない関係にある。

「男は強くて、女は弱い」というイメージがきみの内にもあるかもしれないね。弱音を吐いたり、泣いたりすると、「男のくせに」と言われ、はきはきと意見をいったり、反論したりしただけで、「女のくせに」と言われたり。いずれも、社会に広く受け入れられている「男らしさ」や「女らしさ」のイメージに反しているというわけだ。【　X　】、今では男女平等という考え方が広まっていて、日本でも、公の場での女性に対するあからさまな不公平や差別は少なくなったように見える。しかし一方で、〈　中略　〉女性に対する「虐待」と呼ばれる精神的、身体的暴力もあとを絶たない。

「強い［A］対弱い［B］」や、それと密接に関係している「強い［C］対弱い［D］」という困った二元論から抜け出すことなしに、人類の幸せな未来はない、というヴァンダナの考えに、ぼくは共感する。

こういう困った二元論から抜けだすためには、どうしたらいいのだろう?

その筋道を見つけることこそが、本書の目標だと言ってもいい。ここではとりあえず、すでにこれまでの話を通じて見えてきたことを、「三つの筋道」としてまとめておきたい。

まず第一の筋道として、弱い者の視点にたってみる、ということ。弱者の身になる、と言ってもいい。すぐに思い浮かぶのは、二六歳の若さで死んだ童謡作家の金子みすゞのことだ。

たとえば、彼女に「大漁」という作品がある。漁港の町の朝、人々がイワシの大漁を祝っている。

浜は祭りのようだけど
海のなかでは
何万の
鰮のとむらい
するだろう。

みすゞは祭のような賑わいから、ふと、視点をずらして、［E］の方に思いをはせている。

みすゞが同情を寄せるのは生きものばかりではない。降り積もる雪を見て、彼女は思う。「上の雪さむかろな」、「下の雪重かろな」「中の雪さみしかろな」（「積った雪」）

「なまけ時計」という作品では、みすゞはネジ巻式の柱時計の身になって考える。家の人々がみな休んでいる日曜日にも、なんで自分だけせっせと働き続けなければいけないのか、と。そう思いながら、時計は昼寝してしまう。でも、やがて……

なまけ時計はみつかって、
きりきり、ねじをねじられて、
ごめん、ごめん、と鳴り出した。

みすゞが描く世界では、強い側に立っているのはいつも、自分自身を含む人間たち。その人間の暮らしは、多くの生物の犠牲や無生物の奉仕によって成り立っている。それはしかたのないことだと思ってはみても、彼女には、どうしても②「すまなさ」の意識をぬぐい去ることができなかったのだろう。

「大漁」では、海の中のイワシたちの葬式を想像してみることで、彼女は、イワシたちのために祈った。

〈　中略　〉

三つの筋道の二番目は、「ちがい」の大切さに注目すること。ここでも、金子みすゞの詩が、助けになる。

「私と小鳥と鈴と」という作品で、みすゞはこんなふうに、「私」を二つのものと比べてみせる。「私」は「鳥」のように空を飛べないが、「鳥」は「私」のように地面を走れない。「私」は「鈴」のようにきれいな音を出せないけれど、「鈴」は「私」のようにいろんな歌を歌えない。その結論が、最後の二行だ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

男性と女性で考えてみよう。男女同権や男女平等という考えは、現代世界に広く受け入れられている基本原則だ。しかし、同じ権利をもつことは、男性と女性とが、「同じ」であることを意味しないし、平等とは両者のちがいがなくなることではない。むしろ、両者の差異を認め合い、尊重しあうことによって、平等は可能になるのだ。みすゞが「みんなちがって、みんないい」というのはそういうことだろう。

③ここで、「強弱」という二つの漢字に改めて注目してみよう。漢字研究者の白川静によれば、漢字の「弱」は「弓」に装飾がほどこされているさまを表し、見た目には美しい儀礼用の弓が、強さにおいては軍事用の弓に劣ることを、同じ部首をふたつ並べて強調しているのだという。一方、「強」の方は、ガの幼虫からとった天蚕糸を弦に使った強靭な弓を表しているという。

とすれば、「強」と「弱」は、もともと、よい弓と悪い弓といった優劣や上下を示しているのではない。二通りの弓があって、それぞれ儀礼用と実用という別々の用途をもっていることを示しているにすぎない。ひとつは美しさに優れ、しかし実用性において劣る。もうひとつは、実用性において優れ、しかし美しさにおいて劣る。

本書の冒頭で話した「相対的」という言葉のことを思い出してほしい。一方の弓は競技や戦闘という場面で、他方は儀礼という文脈でその力をcハッキする。その強さや弱さは、何を基準にするかによって決まる、つまり、相対的なのだ。一般に、ふたつ以上のものの優劣は、時と場合によって、また何を基準にするかで決まるものであって、絶対的でも、固定的でもない。

〈　中略　〉

ついでに、「弱い」を意味する英語の〈weak〉という言葉について一言。いくつかの古代文化に源をもつこの言葉には、もともと、「とるにたらない」「堅固でない」「譲る」などとともに、「順応性がある」という意味が混在しているのだという。弱い方が順応性に富み、強い方が乏しい、とすれば、④弱い方が強くて、強い方が弱い、ということにもなりうるわけだ。

困った二元論を抜けだすための三番目の筋道は、「依存」という考え方だ。

これについて考えるために、再び、ヴァンダナ・シヴァに登場してもらおう。彼女は、長年、インド北部のデラドゥーンにあるナヴダーニャ農場で、仲間たちとともに、農薬や化学肥料を使わない有機農業と、環境教育のための学校を営んできた。ぼくも何度か訪れたが、ナヴダーニャはいつも世界中から新しい生き方を学びにきた若者たちの活気に溢れていた。

オーガニック食品は、健康に良いというので、日本でも人気が高まっている。しかし、ヴァンダナにとって、それは、単に人間の健康だけではなく、家畜の健康にも環境にも良い。【　Y　】、地球全体にとって良いということ。

この農場で撮影された映画『いのちの種を抱きしめて』の中で彼女は、「アース・デモクラシー」という考えについて、ぼくにこう話してくれた。

まず自分が、この地球上の全生命に依存していることを理解することです。酸素がなければ呼吸ができない。だから私たちには木が必要。木は私たち自身だと言ってもいい。

同じように、何千万という種からなる生物の多様性に私たちは依存している。つまり、だれもが、いのちの織物の一部なのだ。だから、とヴァンダナは言う、人間だけの民主主義（デモクラシー）だけではなく、それをさらに超えた地球上の全生命の民主主義、「アース・デモクラシー」が必要なのだ、と。

ヴァンダナはここで「依存」という言葉を使っている。私が「何かに依存している」とは、私が「それなしでは生きられない」ということ。だから、それを認めることは自分の「弱さ」を認めることでもある。

ぼくたちが生物多様性に依存しているということは、無数の生きものたちのおかげで生きている、ということだ。たとえば空気ひとつとっても、植物たちの光合成のおかげ。つまり、ぼくやきみの「今」や「明日」は、植物たちの活動にかかっている。

それは、自分がそんなにも弱く、脆い存在であることを自覚することを意味する

が、一方で、自分がこうして生きているのは、すべての生命のおかげだと思えば、こんなにありがたいことはない。ぼくたちがよく口にする「ありがとう」「いただきます」「おかげさま」といった表現の中には、もともと、この依存と弱さの自覚、そして感謝の気持ちがこめられていたはずなのだ。

「エコ」という言葉のもとになったエコロジーの意味もここにある。それはもともと、個々の研究対象をバラバラに切りとっていたそれまでの科学に対する反省の上にたって、全体的（ホリスティック）なつながりをよりよく理解しようとする新しい科学だった。世界を形づくっているさまざまな要素が、どのように互いに関係し合っているかを探ろうというわけだ。

仏教でも、「因縁生起」や「縁起」という言葉を使ってこれと同じことを教えてきた。それによれば、この世界は、⑤クモの巣のように張りめぐらされた無数の関係性の網（ネット）のようなもので、すべては相互につながり合い、依存し合っている。

この一枚の紙のなかに雲が浮かんでいる

これは現代仏教の代表的指導者であり、詩人であるティク・ナット・ハン師の言葉だ。雲なしに水はなく、水なしに木はなく、木なしに紙はないのだから。さらに、紙を作るには木こりが必要で、人間や樹木が育つには空気や陽光や土や他の生きものたちが必要、というように、あらゆるものがこの一枚の紙の中にあると言える。そう考えれば、もうこの世界には、「私」に無関係のものは何ひとつない、と師は言う。

〈 中略 〉

この関係性の網の中では、だれも完璧ではない。スーパーマンみたいに、ひとりで何でもできる者などいない。あることには秀でているが、他のことには向いていない。言い換えれば、だれもが「強さ」や「弱さ」をあわせもっている。

そして、他者とつながることができるのは、その「弱さ」ゆえだと言ってもいい。スーパーマンは強いかもしれないが、でも、さびしい。だれとも力を合わせて協力し合い、助け合う必要がないから。

「弱さ」のおかげでつながれる。そう考えると、「弱さ」が輝き始める。

（辻信一 著『弱虫でいいんだよ』より）

問1 太線部a「育（む）」・b「ソウサ」・c「ハッキ」について、カタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「自然界の生きものたちは〜奉仕させられることになる」とありますが、ここで言われていることの具体例として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の食欲を満たすために、大量の肉や魚を休みなく加工できる機械が開発されるようになったこと。
イ 人間が牛や馬を使って広い田畑を耕すことで、食べきれないほどの穀物を生産できるようになったこと。
ウ 遺伝子組み換えによる品種改良を行うことで、季節を問わず食べたい野菜が手に入るようになったこと。
エ 飼い主の思い通りにならない生き物の代わりに、動物型のロボットをペットとしてかわいがるようになったこと。

問3 空欄【 X 】・【 Y 】に入る最も適切な語をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア つまり　イ だから　ウ もちろん　エ さらに

問4 空欄 A ・ B ・ C ・ D に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア A 身体　B 精神　C 人間　D 自然
イ A 人間　B 自然　C 男性　D 女性
ウ A 男性　B 女性　C 身体　D 精神
エ A 科学　B 自然　C 機械　D 生命

問5 空欄 E に入る表現として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア たくさんの仲間の命を奪われた魚たちの悲しみ
イ 魚の命を奪ってしまった漁師たちの恐れやおびえ
ウ たくさんの魚の命を奪った男性に対する女性たちの怒り
エ 自分たちをかばって命を奪われた仲間に対する魚たちの引け目

問6 次は、傍線部②「『すまなさ』の意識」について説明した文です。空欄に入る適切な漢字一字を自分で考えて、答えなさい。

自分たち人間の暮らしが、多くの生物の犠牲や無生物の奉仕によって成り立っているということに対する【　　】の意識。

問7 傍線部③「ここで、『強弱』という二つの漢字に改めて注目してみよう」とありますが、次は、「強」・「弱」という二つの漢字に注目している筆者のねらいを説明した文章です。空欄Ⅰ・Ⅱに入る適切な語を、2ページの本文中からそれぞれ漢字二字で抜き出し、答えなさい。

「強」・「弱」は二種類の弓を表すが、どちらを優れた弓とするかは、その弓の【 Ⅰ 】によって変わってくる。筆者は、この例を通して、二つ以上のものの優劣が、あくまで【 Ⅱ 】的なものであることを強調しようとしているのである。

問8 傍線部④「弱い方が強くて、強い方が弱い」をことわざで表したとき、最も意味の近いものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一寸の虫にも五分の魂
イ ペンは剣よりも強し
ウ 柔よく剛を制す
エ 雌雄を決する

問9 傍線部⑤「クモの巣のように張りめぐらされた無数の関係性の網（ネット）のようなもの」を六字で言い表した表現を2ページの本文中から抜き出し、答えなさい。

問10 次は、本文を読んだ小学六年生の明子さんと星子さんによる会話です。空欄A〜Dに入る適切な言葉を、A〜Cは2ページの本文中から、Dは3ページの本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出し、答えなさい。

明子 民主主義って人間だけのものだと思っていたけど、地球上の全生命についても言える考え方なんだね。

星子 そうだね。去年は東京都の知事に女性が選ばれたし、【 A 四字 】という考え方は当たり前になって、「人間だけの民主主義（デモクラシー）」は実感があるよね。でも、「アース・デモクラシー」の方はイメージがわかないね。

明子 本文にあった、食事の前に言う「いただきます」の話、私はあれで「アース・デモクラシー」のイメージがわいたよ。一人の力だけでは生きていけないという自分の「【 B 二字 】」の自覚や、私たち人間が植物や動物といった【 C 十三字 】で生きていることへの感謝が言葉に表われているんだと思うよ。

星子 なるほどね。この地球上で、自分に【 D 三字 】なものは何一つないって考えると、私たちの存在にも深い意味があるって感じられるようになるね。

問11 次の詩は、二重傍線部「みすゞが描く世界」を表しているものの一つです。この詩を読んで、後の問いに答えなさい。

かりゅうど

ぼくは小さなかりゅうどだ、
ぼくは鉄砲の名人だ。

鉄砲は小さな杉鉄砲、
A弾丸は枝ごと提げている。

みどりの鉄砲、肩にかけ、
山みち、小みちをBすたこらさ。

ぼくはやさしいかりゅうどだ、
ほかのかりゅうど行くさきに、

すばやくぬけて、鳥たちに、
みどりのA弾丸を射ってやる。

みどりのA弾丸は痛かない、
鳥はびっくり、飛ぶばかり。

鳥はそのときゃ、怒るだろ、
Cでも、でも、ぼくはうれしいよ。

ぼくはちいさなかりゅうどだ、
ぼくは鉄砲の名人だ。

みどりの鉄砲、肩にかけ、
山みち、小みちをBすたこらさ。

（『金子みすゞ童謡集』より）

(1) 傍線部A「弾丸」(三か所)の読みを、この詩のリズムを踏まえてひらがなで答えなさい。

(2) 傍線部B「すたこらさ」(二か所)とは、どのような様子を表していますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 鳥たちからの仕返しを受ける前に、さっさと逃げようとする様子。
イ「ほかのかりゅうど」より先回りするために、急ぎ足で歩く様子。
ウ 自分の狩りの腕前に気をよくして、軽快な足どりになっている様子。
エ「ほかのかりゅうど」を気にして、足音をしのばせて移動する様子。

(3) 傍線部C「でも、でも、ぼくはうれしいよ」とありますが、なぜ「ぼく」は「うれしい」のですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「ほかのかりゅうど」より先に、獲物である鳥たちに痛みを負わせることなくしとめることができたから。
イ「ほかのかりゅうど」のように本物の弾丸を使わなくても、鳥たちをびっくりさせることができたから。
ウ 鉄砲を持った人間に比べて弱い立場にある鳥たちを、「ほかのかりゅうど」から守ることができたから。
エ 自分が鉄砲の名人であることを、「ほかのかりゅうど」にも鳥たちにも見せつけることができたから。

(4) 詩中の「ぼく」を「小さなかりゅうど」と設定したのはなぜだと考えられますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 確実に獲物をしとめる鉄砲の名人が、実は心のやさしい小さな子どもであるという意外性を表すため。
イ 狩りのような専門性の高い仕事に関しては、年齢や体格に関係なく実力だけが頼りであることを表すため。
ウ 狩りを生活の手段とはしていない子どもでも、大人と同じくらい狩りへの情熱を持っていることを表すため。
エ 大人の利害とは無関係な子どもの目を通して、他の生き物に対する分けへだてのない共感の気持ちを表すため。

二 次の文章は、伊坂幸太郎 作「スロウではない」の一節です。本文を読み、後の問いに答えなさい。本文中の〔 〕の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

小学五年生の「僕」と「悠太」は、運動が苦手で目立たない存在です。クラスには、やはり運動が苦手でいつも一人きりでいる「村田花」や、勉強も運動も万能で中心的存在の「渋谷亜矢」もいます。ある時、クラスに「高城かれん」が転入してきます。彼女は弱気な上に運動が苦手な様子で、村田花と仲良くなります。

運動会を前に、クラスで選抜リレーのメンバーを決めることになり、Aチームは渋谷亜矢を含む足の速い四人に、Bチームはくじ引きで「僕」と村田花、佐藤君、加藤さんの四人に決まりました。「僕」は暗い気持ちになりますが、Bチームの四人で放課後に練習を始めます。悠太や高城かれんも練習に付きそっています。

僕は第三走者だった。加藤さんからバトンをもらうと土を蹴る。腕を大きく振ったほうがいいとは聞いたことがあったから、今までやったことがないほどに振った。息が切れ、もう無理だと思ったところで、村田花が見え、バトンを渡す。

ぜえぜえと呼吸を整えながら集合する。

「うーん」と佐藤君が難しい顔をして、「まあ、こんなものだよな」と横にいる加藤さんを見る。「だねえ」と彼女も応じた。

彼ら二人の速さに比べ、僕と村田花は明らかに遅く、全体のタイムの足を引っ張っていたのは事実だった。が、彼らはそのことを嫌味たらしく指摘することはなく、「こっちはさ、転ばずに走ることを目標にしよう」と言ってくれたのだから優しい。

優しくない人物は、別にいた。少し離れたところで練習をしていた渋谷亜矢だ。僕たちの横を通りながら、「大丈夫? そんな感じだと一周差とかついちゃうよ」と言ってきた。嘲るのではなく、「遅いと目立っちゃうけど、大丈夫?」と心配するような素振りで、こちらの不安を煽った。

「じゃあ、渋谷がこっちに入ってくれよ」と佐藤君が言う。

「駄目だよ。そうしたらどっちも、そこそこの速さになるだけで、共倒れでしょ」

そうだよね、と別の女子が相槌を打つ。ご機嫌取りみたいで僕は不快に思ったが、何も言い返せず下を向いて、靴で校庭の土を削っているだけの自分のほうが情けないことも分かっていた。

「あ、あの」高城かれんがそこで声を出した。

「え?」

「渋谷さんが走り方とか教えてあげたら」と言った。「どうかな」

村田花のためを思ったのかもしれないが、高城かれんは言いにくそうでありながらも、しっかりと声を出した。

「わたしが?」渋谷亜矢は一瞬、驚いた顔をした後で満面の笑みで、手を左右に振る。「無理無理。わたし、走り方とかよく分からないから。自分では走れるんだけど、教えたりは無理」

「そうかあ」高城かれんが残念そうに言ったが、どうやらそのa口調の中に非難めいた色を感じたのか、僕はもちろんそのようには感じなかったのだけれど、渋谷亜矢は敏感なのだろう。「高城さん、わたしが悪いの?」と突っかかった。

「え、そういうわけじゃ」

「前から思っていたけど、高城さん、よくわたしのこと何か言いたそうに見てるよね。気に入らないのかな」

「そんなことはないよ」高城かれんは①かぶりを振る。「わたし、そんなことは」

渋谷亜矢は②芝居がかったやり方で肩をすくめると、「まあいいけど」とその場から離れかけた。

が、そこで僕たちがあまりにしょげ返っていたからだろうか、高城かれんは、「みんなで練習して、少しでも速くなれるようにしよう」と言った。張り切った声でもなく、隣にいる村田花にぼそっと言っただけだったのだが、耳がいい上に感受性が豊かな渋谷亜矢は立ち止まり、戻ってきた。「それって、わたしたちに対する嫌味?」

「え」責められた高城かれんはぎょっとしていた。「そんな」

「そんな感じじゃなかったよ」村田花が答えた。抗議というよりは必死のbベンメイに近い。

「単に練習しよう、ということだよ」僕たちBチームの中で最速の、とはいえAチームに比べれば遅いのだけれど、佐藤君が加勢するように言ってくれた。それを心強く思ったわけでもないのだろうが悠太も、「いちいち怒らないでも」と漏らした。

そのあたりがきっと良くなかった。Bチーム全体が抵抗してきたように、渋谷亜矢は感じたのかもしれない。歴史漫画に出てきた農民一揆を僕は思い出したけれど、彼女はその兆しのような危機感を覚えたのだろうか。

むっとした顔で、わざとらしく溜め息を吐くと、「あのさ、高城さんって、前の学校からどうして転校してきたの?」と訊ねた。

いったいどういう質問か、と僕は少し拍子抜けした。転校に理由があるとすれば、親の転勤くらいだろうと当時の僕は思っていたから、聞くまでもないことをわざわざ口にするcイトが分からない。

「そんなの聞いて、どうするの」と悠太が言う。

転勤でしょ、と思いながら僕は、高城かれんに目をやったが、すると彼女が青褪めているものだから、どうかしたのかと驚いた。貧血で倒れるのかと思った。分かりやすいほどに動揺し、隣の村田花をちらちらと見る。

大きな弱点を突かれたような反応だったが、実際、渋谷亜矢は、その大きな弱点を狙ったのだろう。

「逃げてきたんでしょ?」とそう言った。

「え」と小さく声を上げたのは村田花で、高城かれんはますます青くなり、喘ぐ魚のように口をもごもごさせる。

「いじめられて、転校してきたんでしょ」

「え、そうなの?」もともと知っていたのか、それとも初めて知ったのか分からぬが、渋谷亜矢の横で二人の女子が大袈裟に驚いている。

「わたし、お母さんに聞いたんだよね。学校から内緒で話を聞いたみたいよ」

動揺する高城かれんの様子に満足したのか、渋谷亜矢は立ち去っていく。

残った僕たちBチームはしばらく黙っていた。「そうなの?」と高城かれんに確認することもできない。村田花もショックを受けていたから、初耳だったのだろう。

内緒になってないじゃん、と悠太が呟く。

高城かれんは持病の発作が出たかのように、おろおろしていたが、「わたし今日は帰るね」と言うと申し訳なさそうに帰った。

〈中略1 「僕」たちは放課後にリレーの練習を繰り返します。三度目の練習の時、高城かれんが調べてきた速く走る方法を参考に、みんなでコースを走ってみることになりました。〉

みなでバトンを繋ぎ、村田花がゴールすると同時に高城かれんのもとに駆け寄る。記録を見て、僕たちは、「おー!」と声を上げた。それまでよりもずいぶん速くなった。

すごいすごい、と村田花は興奮し、「高城さん秘伝の教えのおかげだ」と加藤さんも喜んだ。

「秘伝じゃなくて、インターネットにあっただけだから」高城かれんは手を左右に振った。

「いや、これは楽しみになってきたな、運動会」佐藤君が言ったので、僕は慌てて、「さすがにそこまでは」と言った。「楽しみなんかじゃないよ」

よしスタートの練習だけでももう一度やろうか、と加藤さんは言ったがそこで高城かれんを見た後で、「あ、それ」と指を差した。「ネックレス?」

「あ、これは」高城かれんはすぐに自分の首に手をやる。細い紐がかかっており、

引っ張ると服の中から小さなアクセサリのようなものが現われる。「お守り」
「お守り？」
「そうなの。大事な」高城かれんは言い、そのアクセサリ部分をぎゅっと握った。
「それって、中に大事な人の写真が入ってるとか？」佐藤君が言う。
高城かれんは、「うん」とは言わなかったものの否定はしなかった。「これがないと不安だから、先生にも許してもらったんだけれど」
僕たちは、「へえ」と言うだけでそのことについては何も触れなかった。彼女が苛められていた、という話を知ったからか、きっとつらいことを思い出した時にはそういったグッズがあったほうがいいのだろう、と思ったのだ。
「ねえ、楽しそうに喋ってるけれど、ちゃんと練習してるの？」急に後ろから声がし、振り返ると渋谷亜矢が立っていた。
わ出た、と思わず声を上げそうになる。
「今さ、高城さんの教えのおかげでタイム良くなってきてるんだよ」
佐藤君は裏表のない、素直な人だから正直にそう言ったが、僕は、「そんな風に言ったら、きっと渋谷は不愉快になるぞ」と察した。
案の定、渋谷亜矢は、「教えって何それ」と小馬鹿にした言い方をした。
「あ、わたしの教えじゃなくて、ただ調べたら書いてあっただけで」高城かれんはひたすら低姿勢で、言葉を選びながら答えている。
僕は悠太と顔を見合わせた。面倒臭いな、と悠太が言いたげなのは伝わってくる。
「でもさ、そんなに調子いいんだったら、ビリにならないでよね」
「そんなこと言われても」そうすぐに答えていたのは僕だった。
まさか僕に反論されるとは思ってもいなかったのか、渋谷亜矢は不機嫌丸出しの顔になり、③目を三角にした。「ビリになったら、謝ってよね」と力強く言う。
「謝るって誰に」佐藤君と加藤さんの声が重なるが、その時はすでに渋谷亜矢はほかの女子と一緒に背中を向け、校舎に戻り始めていた。
僕たちはやや暗い気持ちで顔を見合い、少しして、「あとちょっと練習しようか」と誰からともなく、言うことになった。
「何だよ渋谷、厳しすぎるよな」悠太が口を尖らせる。「あれ絶対、親の真似だよ」
「そうなの？」村田花が聞き返す。
「分からないけど、あんな言い方が渋谷のオリジナルとは思えない。誰かのリメイクだ」悠太の言葉に僕は笑ったが、ほかのメンバーは首をひねるだけだ。
ビリになったら謝る、とはかなり理不尽なお題だったが、目標ができると人はそれなりに張り切るのかもしれない。僕たちは、「ビリにはならないように」を合言葉に、それまで以上に練習に精を出した。

〈中略2　運動会当日、リレーの開始直前に村田花は足を痛めた様子を見せます。競技が始まり、加藤さんからバトンを受け取った「僕」は、必死に走りました。〉

バトンを持つ手を意識しながら村田花の姿を探す。
村田に渡さなくちゃ、村田に、と思ったところで、村田花の姿がないことに気づき、唖然とした。
村田花がいない。
僕の頭の中で、音もなく混乱の思いが充満する。何がなんだか分からない。いたずらなのか？　僕を困らせて、誰かが笑っているんじゃないか。
暗い想像が僕の全身を回った。
「こっち」と声をかけられたのはその時だ。
第四走者が立つ場所で、高城かれんが手を振っていた。
どうして高城かれんが？　選手じゃないのに。
「こっち！」
悩んでいる暇はない。必死に手を伸ばす彼女は真剣で、僕も無我夢中で、右手を精一杯伸ばしていた。
バトンを彼女の右手に置いた瞬間、僕はそのままよろけながらトラックの中に入り、しゃがみ込む。レースがどうなっているのかと気に掛ける余裕はなく、息を整えていた。が、まわりから急に歓声が大きく上がりはじめ、それはどよめきのようなものであったから、さすがに顔を上げずにはいられなかった。
高城かれんが力強く走っていた。
テントの中でマイクを握る放送係の女子が、「速い速い」と興奮した声を出している。
僕は口をぽかんと開けたまま、動けない。
彼女はぐんぐんと速度を上げ、あっという間に二位の児童を追い越し、渋谷亜矢との距離を詰めたと思うと、何事もないかのように抜き去り、直線距離を疾風みたいに駆けた。
うわあ、と僕はただひたすら呆気にとられた声を発するほかない。
そして、高城かれんは最後のコーナーを曲がると、失速することなくゴールテープを切った。
僕は声が出せず、走ったばかりで足腰がへなへなしていたせいもあるけれど、その場で這うように村田花のそばに行く。手を口に当て、泣いている表情を見れば、彼女も、高城かれんの俊足については知らなかったのだと分かった。
高城かれんは喜んではいなかった。肩を落とし、とぼとぼと戻ってくると、「ごめんね」とだけ言った。代走したことを謝ったのか、足の遅いふりをしていたことを謝罪したのか、理由は分からぬが、彼女は怯えているようだった。佐藤君や加藤さん、そして悠太が駆け寄ってきて、高城かれんに感動の言葉をたくさんぶつけたが彼女は肩をすぼめていた。
そして、どうなったか。
僕たちは失格となった。

〈中略3　渋谷亜矢と彼女の母親の主張によって、登録した選手以外の児童が走ったBチームは失格とされます。放課後、気持ちが収まらない村田花と共に「僕」と悠太は職員室を訪れます。担任の先生の「磯憲」と話をするうちに、「僕」たちの気持ちは和らいでいきます。〉

帰り道で悠太は言った。
「司（「僕」の名前）、今日の高城かれんは驚いたよな」
「そうだね。あんなに速かったなんて」
「恰好良かった」
「ほら、あれこそ」僕は声を高くする。「ピッコロ（少年マンガの登場人物）が服を脱いだ感じだ」
「それだ」悠太は言った後で、「でも、どうして、遅いふりをしていたんだろ」と疑問を口にした。
何でだろう、と答えたものの僕には、彼女の気持ちが少し分かる気がした。僕が足がすごく速かったとしたら、悠太は一緒にいてくれないかもしれない。悠太がすごく俊足だったなら、僕は気後れして、自分が情けなくなったはずだ。④つまり、そういうことなのではないか。
運動会以降、高城かれんを取り巻く空気は少し変わった。同級生たちが一目置くようになったのだが、だからといって高城かれんがクラスの中心人物になることもなく、前と変わらず村田花と一緒にいる。
そしてそれは、運動会が終わり、半月ほど経った頃に起きた。
やはり、事を起こしたのは渋谷亜矢だ。放課後、掃除の最中だった。
「これ、誰の？」と非難する声を発した。見れば渋谷亜矢は右手にアクセサリを持ち、上に掲げている。
僕はすぐにそれが、高城かれんが首からぶら下げていたものだと分かった。隣にいた悠太もすぐに、「あ、あれ」と洩らす。
何かの拍子に落ちたのだろう。高城かれんが、「ごめんなさい、それわたしの」と小さい声を出した。受け取るために、歩を進めた。
「ちょっと、こういうの持ってきていいの？　アクセサリは駄目でしょ」
「それ、先生にも許可をもらって」高城かれんは顔を引き攣らせ、手を伸ばすが、渋谷亜矢は取らせまいとアクセサリを遠ざける。
「返して」「没収だよ、これ」「だって先生に。おまもりだから」「おまもりって、何それ」「返して」「返してください、と言えば？」「返してください」
⑤おいやめろよ、と誰かが言い、残念なことにそれは僕ではなかったが、その一言に便乗するように、「やめなよ」と続けたのは僕だった。悠太も言った。「返してやればいいじゃん」
「関係ない人は黙っててよ」渋谷亜矢がぴしゃりと言う。
「関係なくはないだろ」悠太が言い返した。「というか、そういうのやめろよ」
「そういうのって何」
「誰かを苛めたりすることだよ」悠太は覚悟を決めたのか、ここは撤退しないと決めたのかもしれない。重い衣を脱ぎ捨てたかのような軽やかさすらあった。
「苛めてないでしょ。これ、学校に持ってきちゃいけない、ってだけで。どうして、そんなこと、わたしが言われないといけないの？　高城さんが前の学校で苛められてたから？　苛められたほうにも原因があるかもしれないでしょ」
「ないよ」⑥静かな声がそこで、教室内に落ちた。大人びていながらも、切実さにあふれており、見知らぬ誰かが発したのかと思ったが、声の主は高城かれんだった。
「いじめられるのに理由なんて、ないよ。悪くないのに、いじめられることなんてたくさんある」
僕たちは、彼女をじっと見る。村田花は体を硬直させたまま、動かない。
渋谷亜矢は、「何なの、いったい」と苦笑する。「そういう感じだから、苛められたんだと思うよ」と隣の女子とうなずき合った。「だいたい、これ、おまもりって何が入ってるの？」とアクセサリをいじくり出す。
「やめてあげて」と村田花が言った。
渋谷亜矢が、やめてあげる、わけがなく、「これ中に写真とか入ってるやつでしょ。固くて、開かないけど」と苛々したと思うと、床に落とし、上靴で踏みつけた。
悲鳴を上げたのは村田花で、例によって彼女はすでに泣きはじめていた。僕はさすがに怒りを、心の中のドン・コルレオーネ（映画の登場人物）が眼光鋭く、叫ぶような憤りを覚え、渋谷亜矢につかみかかろうとしていた。悠太も同様だったはずだ。

が、その前に高城かれんが、「そういうのは絶対にやめて」と言った。哀しげな眼差しで、懇願するようだった。「本当にやめたほうがいいの」

「やめたほうがいい、って何を？　呪いでもあるの？」渋谷亜矢は床からアクセサリを拾い上げる。「あ、やっと開いた」と触る。

人の大事なものを無残に汚して平気でいられる態度に、僕は全身から湯気が出るほど怒っていた。ただ、高城かれんが穏やかなのが気になり、動けなかった。静かで、寂しげだった。村田花が、渋谷亜矢に近づこうとするのを手で制してもいた。

「何かあってから後悔しても、どうにもならないから。いじめたりしたら駄目なんだよ」高城かれんは言う。

渋谷亜矢はわざと聞き流しているのか、「ええと、あ、写真じゃん。誰の？」と壊れたアクセサリから小さな紙めいたものをつまみ出した。少し広げるようにし、見た。そして、頬を引き攣らせた。⑦目を丸くしていた。「え」と言う。

「誰の写真か分かった？　どういうこと？」と悠太を見る。

渋谷さん、自分で自分の顔、踏んづけたんだよ」

アクセサリに入っていたのが、渋谷亜矢の写真なのだと遅れて、分かった。どうして？

「わたし、渋谷さんがどういうことをするのか分かるの。気に入らない相手にどういうことをするのか。相手の大事なものをどうやって傷つけるのか。渋谷さんに、つらい気持ちを分かってほしくて、入れておいたの」高城かれんは⑧声は冷静だったけれど、涙を流していた。「渋谷さんのやることはすごく分かるけど、だけど、そういうことすると取り返しがつかないんだよ」

「どういうこと」

「わたしも、あなたと一緒だったの」

「一緒って何が」

「前の学校で、クラスの中心で威張って、みんなを馬鹿にして。自分が一番だと思っていて」

村田花は口をぽかんと開けていた。僕もそうだったに違いない。

「騙したの？」渋谷亜矢の問いかけは、少しずれていたはずだ。高城かれんは別に、騙したかったわけではない。

磯憲の言葉を思い出す。「もし、高城が苛められっ子だったとしたら、何か変わるか？」

もし、いじめっ子だったら？

何か変わるのか？

変わる、と僕は思いかける。誰かをひどい目に遭わせたのだから、その人を許してはいけない、と。

⑨一方で磯憲の声がさらに聞こえる。「転校してきて、やり直そうとしているんだったら、やり直させてやりたくないか」

高城かれんはやり直したかったのだろうか。

その後、渋谷亜矢は教室を出ていき、残された僕たちは無言で掃除を続けた。村田花はいつの間にかいなくなっていた。

問1　太線部a「口調」・b「ベンメイ」・c「イト」について、カタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問2　傍線部①「かぶりを振る」の「かぶり」とは何のことですか。漢字一字で答えなさい。

問3　傍線部②「芝居がかったやり方で」と同じ意味で用いられている表現を6ページ上段の本文中から六字で抜き出し、答えなさい。

問4　傍線部③「目を三角にした」・⑦「目を丸くしていた」という表現は、それぞれどのような感情を表していますか。最も適切な組み合わせを次から選び、記号で答えなさい。

ア　③　不満　⑦　興奮

イ　③　怒り　⑦　驚き

ウ　③　不快　⑦　恐怖

エ　③　哀れみ　⑦　憎しみ

問5　傍線部④「つまり、そういうことなのではないか」とありますが、「僕」は高城かれんの考えをどのように推測しているのですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　俊足であることが分かってしまうと、クラスの中心人物である渋谷亜矢に気に入られ、彼女たちのグループの一員として行動しなくてはいけなくなると考えたのではないかということ。

イ　俊足であることが分かってしまうと、Aチームの代表選手に選ばれてしまい、自分を必要としている村田花と一緒にいられる時間が少なくなると考えたのではないかということ。

ウ　俊足であることが分かってしまうと、目立たない存在の村田花が自分と一緒にいることに引け目を感じ、二人の関係が気づまりなものになると考えたのではないかということ。

エ　俊足であることが分かってしまうと、クラスの中心人物である渋谷亜矢に目をつけられて、敵対心をむき出しにされる可能性が高いと考えたのではないかということ。

問6　次の文は、傍線部⑤「おいやめろよ――と続けたのは僕だった」から読みとれる「僕」の人物像を説明したものです。空欄に入る適切な言葉を、Ⅰは〈中略1〉以降〈中略2〉以前の本文中から漢字三字で抜き出し、Ⅱは自分で考えて漢字二字で、それぞれ答えなさい。

「僕」は、自分に対する強い自信が持ちきれず、思ったことをいつもすぐに口にできるわけではないが、【　Ⅰ　】な行為を許したくないと思う【　Ⅱ　】感を持った人物として描かれている。

問7　傍線部⑥「静かな声がそこで、教室内に落ちた」という表現が与える印象として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　対立する両者の声が入り乱れる中で、ひとり言のような静かな声は誰にも気づかれなかったという印象。

イ　対立する雰囲気と興奮した空気の中で、それらとは異なる次元の冷静で重みのある発言がなされた印象。

ウ　興奮した高い声でのやりとりが続く中、それらとは異質の落ち着いた静かな低音の声が響いたという印象。

エ　興奮した両者の対立が次第にはげしさを増していく中、権限をもった第三者の立場から仲裁がなされた印象。

問8　傍線部⑧「声は冷静だったけれど、涙を流していた」とありますが、この時の高城かれんの心情として**ふさわしくないもの**を次から選び、記号で答えなさい。

ア　以前の自分と同じようにふるまう渋谷亜矢を前にして、人をいじめたことで胸に刻まれた深い傷に今なお苦しむ気持ち。

イ　気に入らない人を傷つける渋谷亜矢に、傷つけられる人の心の痛みを何とかして理解してもらいたいという切実な気持ち。

ウ　この先渋谷亜矢が自分と同じ苦しみを抱えることがないように、彼女に人をおとしめることをやめさせたいと願う気持ち。

エ　渋谷亜矢の自分に対する態度や行動を見ていて、過去に自分がやってきたことの愚かさにやっと気づき、深く反省する気持ち。

問9　傍線部⑨中の「磯憲の声」を、この時「僕」はどのように理解したのですか。次の空欄に入る適切な言葉を自分で考えて、二十字以上二十五字以内で答えなさい。

もしも高城かれんが転校してきてやり直そうとしているのであれば、［　　　　］という意味に理解した。

二〇一七年度（平成二十九年度）
浦和明の星女子中学校入学試験
（第一回）

国語 解答用紙

受験番号

得点
※

一

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11
a 育（む） b ソウサ c ハッキ		X Y				I II			A B C D	(1) (2) (3) (4)
※	※		※		※		※		※	※

二

問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9
a 口調 b ベンメイ c イト					I II			20
※		※	※		※	※		※